

ジェットコースターの楽しみ方

第12期 松山 峻典

私は多くの人から「お前は自由な時間がない」という趣旨の言葉を頂きました。ゼミでの私の、入ゼミ後はじめての集まりの後に同期の談笑の輪に混ざらず別室で小野先生に電話を掛ける姿（第11期ゼミ長の内藤さんが傍にいてくださり心強かったです）、法科大学院棟の外で警備員の目を盗みつつ他の三田論チームの謝罪メールを寒空の下独りで代筆する姿（日付が変わる直前に見つかって酷くお叱りを受けました）、同期の卒論を徹夜で執筆し早朝東京駅に提出に行く姿（厳密な徹夜はこれが初めてでした）など、他にも思い当たる節はありますが、このような姿を見て、みなさんそう感じたのではないのでしょうか。確かに、私は人一倍時間も精神もゼミに賭し、三大欲求に勝るとも劣らない水準でゼミを優先しておりましたが、自由でなかったかというところというわけではありませんでした。なぜなら、私の考える自由とは、「自分の考えに基づいて行動を自主的に選択すること」だからです。ともすれば自由がないように映り誤解されるかもしれないゼミでの姿は、すべて私が望んだものでした。それゆえゼミでの私は、誰よりも自由でした。

さて、詭弁すれすれの私の独白を読みおわり、そろそろ「タイトルのジェットコースターと何の関係あるんだ？」という疑問を抱かれている頃ではないでしょうか。何の捻りもありませんが、ジェットコースターは小野ゼミのことを指しております。小野ゼミでの密度の濃い時間があつという間に過ぎ去ってしまう点に加え、ゼミに入る前に抱いていた高揚感が厳しい体験によって頭から消え去り、早く終わってほしいと願ったり、入ってしまったことを後悔したり、辛いことに目を瞑ったりする点も、ジェットコースターと似ているのではないかと思います。そんな2年間乗りっぱなしの小野ゼミジェットコースターですが、体験している際に、たとえ某ネズミ帝国に遊びに来た女子高生よろしく、何も考えずに起伏に一喜一憂して奇声をあげているような状態であったとしても、最後まで体験しきりさえすれば、必ず他では得難い何かを体験者にもたらしめます。もちろん、それだけでも十分貴重な体験といって差し支えないのですが、今後体験する誰かのために、この体験をより良い物にする方法を書き残したいと思います。それは、ジェットコースターが駆け抜けていく際に、瞑っていた目を開く勇気を持つこと、すなわち、辛く忙しいゼミ生活の中であって、主体性を失わずにいつまでも自由でいることです。なぜなら、自由でなくなり、ゼミをやらされていると認識すると、楽しいはずのジェットコースターが途端に苦行へと転じてしまうからです。そのため、小野ゼミジェットコースターを誰よりも自由に、そして誰よりも楽しむことができた私は、きっと誰よりも少ない辛さで、誰よりも多くの他では得難い何かを得ることができたと確信しております。

最後に、このような一生に一度しか乗れない素敵な小野ゼミジェットコースターに携わってくださったすべての皆様に、ここで感謝を表し、まとまりのないエッセイの結びに変えさせて頂きたいと思います。